



ジェンダーからみた明治期の女性文学

みねむら しづこ

文学部 国文学科 教授 峯村 至津子

樋口一葉や泉鏡花を中心に明治期の文学を研究
文壇で真逆の評価となった樋口一葉と田澤稲舟を比較コメントできる
研究領域

明治期の文学

女性文学

樋口一葉

泉鏡花

京都女子大学は、教員の研究活動や社会連携など“社会のための女子大学”の姿をお伝えするニュースレターを発信しています。今回は明治期の文学を研究する、文学部 国文学科の峯村至津子教授をご紹介します。

■ **樋口一葉や泉鏡花を中心に研究。文学史の中で埋もれた女性作家を積極的に取り上げ、学生に紹介。**

峯村教授は、樋口一葉や泉鏡花を中心に明治期の小説や近代短歌、翻訳文学、歴史小説などを研究しています。近年は明治期の文芸雑誌の挿絵や口絵も研究対象としています。講義では文学史で光が当たっていない女性作家たちを積極的に取り上げ、男性中心の当時の文壇での評価がその後の研究にどう受け継がれているかを学生たちと考察しています。そして、学生たちに、女性作家のおかれた明治期の文壇の状況を知ることから自らの状況を捉え直し、社会に羽ばたいて欲しいと考えています。

■ **男性中心の明治期の文壇で、自分の意見を主張しすぎたため、文学史の中で埋もれてしまった女性作家。**

明治期の文壇において、女性作家は少なくありませんでしたが、評価するのは男性でした。そのため、女性作家が作中で当時の男性社会に露骨に異議を唱えようとすると、文壇で認められませんでした。そのような女性作家及び作品はその後にも評価を得られず、広く作品が知られることなく文学史の中で埋もれてしまっています。また、ヒロインには当時の女性の模範的姿が、また女性作家には「女であるのにより女を装い、女性らしいとされる言葉で文章を書く女装文体」が求められていました。峯村教授は、当時の小説の評価の出発点に明治期の男性中心の文壇における評価があることは広く知られるべきであると考えています。

■ **文壇で評価を得た樋口一葉と、主張する女主人公を描き受け入れられにくかった田澤稲舟。**

峯村教授は、様々な階層の女性たちが抱える諸問題を描いたことで明治期の文壇で高く評価され、現代でも近代文学を代表する女性作家として知られる樋口一葉と、一葉に並ぶ才能と称されるも過激な描写で文壇から批判され後世に名を残せなかった田澤稲舟を比較分析しています。

一葉と稲舟は、意見が言えなかった多くの女性に代わって、作中で主張を発信していますが、ヒロインの描き方に違いがあります。一葉は、家庭の中の一見従順に見える母や娘、過酷な環境を自ら選び取って生きようとする様々な働く女性たちを文壇での批判をかわすようにうまく描いていますが、稲舟は、個性を生かした仕事を選択して自立して生きる道を模索する、当時の常識から逸脱した現代的とも言えるヒロインをストレートに描いています。また、文体にも違いがあり、一葉は雅俗折衷の名文で小説を書いています。稲舟は日常で使う飾らない表現、強い罵りなど乱暴な言葉も多用しています。

峯村教授は、文学史、女性史の歩みを知る学生たちならば、男性中心の文壇で評価されなかった稲舟のような女性作家の魅力あらためて現代に発信できると考えています。

峯村 至津子 (みねむら・しづこ) Profile

<https://gyouseki-db.kyoto-wu.ac.jp/kyuwhp/KgApp/k03/resid/S001637>

略歴 1967年生まれ。1997年京都大学大学院 文学研究科 国語学国文学専攻 博士後期課程 研究指導認定退学。博士（文学）。京都女子大学短期大学部 文学科 国語国文学専攻 准教授、京都大学 文学部 非常勤講師などを経て、2012年より現職。

論文 「〈恋愛至上〉の描き方—泉鏡花「外科室」論—」（単著/2022/京都女子大学大学院文学研究科研究紀要『国文論藻』）

「恋とは我心に咲出し花—樋口一葉「闇桜」論（その二）—」（単著/2019/京都女子大学国文学会『女子大國文』）

著書 『日本女性文学大事典』（分担執筆/2006/日本図書センター）※担当：網野菊、大塚楠緒子、北田薄氷、木村曙、鷹野つぎ、中島歌子
『一葉文学の研究』（岩波アカデミック叢書）（単著/2006/岩波書店）

<本件に関する報道関係者の皆様からのお問合せ先>

- 京都女子大学入試広報課 岡橋・竹縄 TEL: 075-531-7054 FAX: 075-531-7222
- 京都女子大学広報デスク (プラニング・ホール内) 福嶋・井上 TEL: 06-4391-7156 FAX: 06-4393-8216
- 京都女子大学HP <https://www.kyoto-wu.ac.jp>